



## 牛御前社(牛嶋神社)の 歴史と信仰(下)

前号では、牛御前社では、疫病や災害との関わりが深い「牛頭天王」が庶民信仰として受容されていたことに触れました。本号では、同社における牛頭天王信仰について考えていきます。

### ■須佐之男命厄神退治之図

図1は、牛御前社近隣に住居を構えていた葛飾北斎晩年の作と伝



図1『須佐之男命厄神退治之図』(協力 墨田区)

えられています。ここでは須佐之男命が疫病をもたらす疫神を屈服させ、病を蔓延させないよう証文をとっている姿が描かれています(1)。本図からは、十二世紀後半に作成された図2の「辟邪絵」(『地獄草紙』の構図を思い起こさせます。同図は、天刑星(唐代の歳星所生の七星のひとつ)が、牛頭天王を酔につけて食し、疫神を退治している描写となつています。この時点では天刑星は牛頭天王とは異なった存在でしたが、『竈竈内伝』や『神道集』等によって、やがて牛頭天王が帝釈天に仕えていたときの名前であったとされ、同体とされるようになりました(2)。



図2「辟邪絵」(奈良国立博物館蔵)

ここでは須佐之男命が厄神を退治していますが、念頭には疫病予防・平癒といった牛頭天王の利益が期待され、奉納されたものと考えられます。

### ■牛頭天王と災害

近年、保立道久氏は著書において、九世紀に各地で頻発した地震・火山噴火等の自然災害との関わりの中で、スサノヲ(牛頭天王)が「地震神」として信仰され各地で祀られるようになったとされています(3)。

貞観十一年(八六九)五月には、平成二十四年(二〇一一)の「東日本大震災」とほぼ震源を同じくする大規模な「貞観地震」が起きています(4)。六月には、牛頭天王を祭神とする京都の祇園社で「祇園会」が開始され、さらに陸奥国の清水峯神社(現宮城県)へ牛頭天王が移座されています。

多発する自然災害が、当時の政治に大きな影響を与えたことは明らかであり、中国の天譴思想の下で、頻繁に天皇の詞の中で語られています(5)。

遡る貞観六年(八六四)には、富士山で大噴火がおこるなど、正に自然災害の時代でした。

牛御前社の建立はこうした中でなされています。京から陸奥国にまで牛頭天王が勧請されている点から考えても、その途上にある武

蔵国の牛御前社に、自然災害との関わりの中で、牛頭天王が勧請された可能性が考えられます。

(墨田区文化財調査員

大関 直人)

注

(1) 同図は、「関東大震災」により焼失し、現在は復興パネルのみが残されている。

(2) 『竈竈内伝』(南北朝に安部晴明に仮託して作成された陰陽道による天文曆数書)、『神道集』(南北朝になった神道説話)

(3) 保立道久「歴史のなかの大地動乱―奈良・平安の地震と天皇」(岩波書店、二〇一二年)

(4) この中で保立氏は、「貞観地震」という従来の呼称に対して、日本の元号である「貞観」と中国の元号である「貞観」と混同を避けるため、「陸奥海溝地震」の名を用いることを提唱されている。

(5) 聖武天皇をはじめとする天皇の詔には、中国の「天譴思想」の影響が見られている。すなわち自然災害と天皇の「徳」が問題とされており、自然災害が多発するのは天皇自身の「徳」に問題があるとする考えである。

# 昭和の墨田区風景、 その原点にあるもの。

壬生 篤(作家・編集者)



写真上：京島二丁目  
写真左：向島三丁目から

東京スカイツリー<sup>①</sup>から眺めた墨田区の風景は、東京タワーから見た都市景観とは、やや異なっている。

その南西側には、基盤の目状に区画整理された風景が広がっているのに対し、北東側(荒川方面)にはより低層な町並みが、雑然と広がって見える。こうした風景は、今や東京タワー周辺にはない。

方角による景観の違いは、町から見上げた東京スカイツリーの風景からも感じることが出来る。例えば向島三丁目辺りから東京スカイツリーを見ると、直線的な路地

を中心にしたシンメトリックな風景の奥に、その姿を望むことが出来る。しかし、東武亀戸線が走る北東側からは、直線的な路地自体が少なく、家々の屋根の上に東京スカイツリーが見えるという風景が一般的である。

この景観の差は、どこから来たのだろうか？

墨田区エリアの歴史は、江戸時代より災害とともにあった。

1657年の「明暦の大火」により、江戸の町が焦土となったことから始まった江戸の防災都市計画。江戸の町は隅田川の東岸へと

拡大することになった。大火の2年後に開鑿された現在の竪川、北十間川、大横川、横十間川などの

運河は、この町の基礎を作った。

明治43年(1910)には、荒川、隅田川が大水害をもたらした。その翌年から開始されたのが、荒川

放水路(現在の荒川)の開鑿工事だった。

大正12年(1923)には「関東大震災」が発生、被服廠跡(現在の横網町公園周辺)を筆頭に、墨田区エリアに大きな被害をもたらした。だが当時、本所区は東京市内にあったが、向島地区は南葛飾郡内にあった。それにより本所区は

震災復興事業の対象地区となっ

たが、向島地区はその対象外とされた。現在の向島一〜三丁目辺り

(旧・本所区内)の区画整理は、復興事業の中で行なわれたのに対し、

昭和7年(1932)に向島区となる北東部の区画整理は進まなかつ

た。その差が現在、町から東京スカイツリーを見上げた景観の違い

をもたらしているのである。

そして、昭和20年の空襲(特に3月10日の東京大空襲)。最大被害区の一つである旧・本所区では

約96%が、旧・向島区でも約57%が被災したとされるが、その際、

防火帯として大きな役割を果たしたのが、東武亀戸線と明治通り

だった。

東武亀戸線では、全行程3.4<sup>キ</sup>の内3.2<sup>キ</sup>の部分が被災し、結果的に

4駅が失われた(北十間駅、平井街道駅、十間橋通駅、虎橋通駅)。

曳舟駅から小村井駅へと向かう亀戸線2つ目の踏切脇には今も、

虎橋通駅のプラットホームの支柱跡が残っている。虎橋通駅が廃駅

となったのは昭和20年3月10日である。

だが東武亀戸線は、自らは空襲の犠牲となりながらも、沿線北側の町への延焼は防いだ。「キラキ



吾嬬町東四丁目  
(昭和34年)

ラ橋商店街」やその周辺に残る古い木造の町並みは、東京大空襲を奇跡的に免れた東京旧市街なのである。

大災害、そして復旧・復興、防災都市造り……。それは、墨田区エリアにとって江戸時代以来のテーマだった。

「下町には人情がある」などといわれてきた。子供の頃のこの町の記憶として私が思い出すのは、

水害などに見舞われたとき、隣近所が当たり前のように助け合っていた風景である。私は、災害・防災と「下町の人情」とは切っても切

れない関係にあると感じてきた。繰り返された災害は、助け合いの心をも育んできた。今後のこの町の防災を考える際にも、忘れてはならないことだろう。

そんな防災精神の象徴的風景ともいえる、この町に残る東京旧市街の景観が、いつまでも残り続けてくれることを、願っている。